

田原藩義倉・報民倉

民に報いたいと願った大名

石川 洋一

● 目 次 ●

はじめに 3

一 藩内事情と報民を願う「御直書」 9

財政難に苦しむ田原藩 9 急養子康直と渡辺華山 12

報民倉建設期の社会状況 15 田原に届けられた「御直書」 18

佐藤一斎の救荒書「済愆略記」 22 飢饉への諫めと教諭 26

二 義倉設立に関わる家中 30

「御直書」の具現化を図る用人 30 竹木の寄進 33 米献上 37

用地確定・役職任命・地祭 42 御手伝願い出 44

御普請場整地から石掘り出しへ 51 参加者の広がり 53

報民倉の棟上げ 58 冥加として御酒いささか差し上げ 59

三 天保の飢饉における救恤 64

報民倉の披露と褒詞褒賞 64 大風雨と康直の窮民視察 67

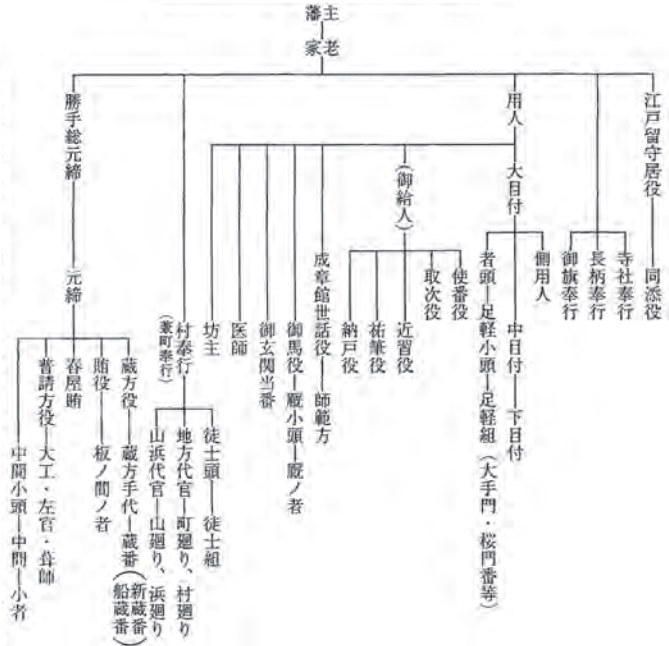
藩の飢饉対策 70 救恤の実態 72 武士への御救い 77

おわりに 82

参考文献 85

あとがき 87

藩の職制の大綱



田原藩領地図

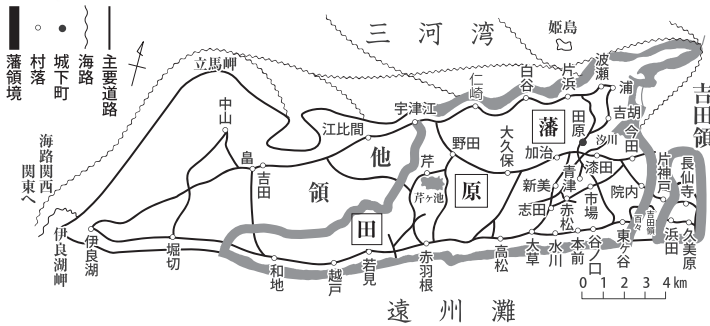


図1 藩の職制の大綱 田原藩領地図

『藩史大事典 第4巻 中部編Ⅱ 東海』雄山閣出版 1989年 木村礎・藤野保・村上直／出典『天保八年家中分限帳』『天保年間御用方日記』

義倉―備荒貯穀のための施設としては他に社倉・常平倉などがある。社倉は農民の拠出が基本であるが、領主の下賜米金も充用されたので、義倉と社倉は区別がつきにくいところがある。『国史大事典』では報民倉は社倉として取り上げられているが、『田原町史』中巻では義倉としているので、本書では義倉とする。

褒詞―「三宅土佐守(康直)窮民扶助行とときめる由聞召されて賞せらる。」(『續徳川実紀』卷二、天保九年八月十七日条)。

はじめに

義倉*とは、「凶年に窮民を救う目的で、平時に貧富の差に応じて穀物を徴収し、これを貯えておく倉」(『広辞苑』)である。田原藩では、十一代藩主三宅康直の治政、天保六年(一八三五)十一月報民倉と名付けられた義倉を竣工し、翌天保七年(一八三六)七月から運用を始めている。たまたまこの年は全国的にも天保の飢饉後半最大の被害をもたらした年であり、東海地方でも記録的な天候不順であった。八月には大風雨高潮に襲われ、大凶作となったが、まさに時宜を得、報民倉の貯穀米は田原の人々を飢饉から救っている。その功績は、幕府から褒詞*を授けられるほどのものであった。

報民倉という名称から何か新しい時代を切り開くような義倉という印象があるが、その建設・運用の実態はこれまでよくわかっていなかった。渡辺華山に関する著作の多くは華山の功績の一つとして報民倉にふれているが、近年まで『田原町史』(中巻)のほか、拙共著『田原藩』による簡単な紹介はあるが、具体的な内容を記述しているものはない。『田原町史』(中巻)の報民倉についての記事を見てみよう。

天保六年(一八三五)一月二十一日藩主より報民倉建設内示あり、同年十二月藩主直書をもつて来一年藩特別儉約令を出す。この年田原藩は諸国諸領の飢饉襲来により、やがて来るべき凶作にそなえ、義倉の建設を企画した。そして九月十五

日に城の東南外堀沿いに義倉建設の地鎮祭を行った。これより前から倉の名を「報民倉」と名付けられ、全く領民救済のための義倉であることが広く宣伝されていた。そのためか領民たちの建設意欲を鼓舞して、全部勤労奉仕という好ましい体勢で進行したのであった。士、農、工、商、寺院、山伏、子供に至るまで奉仕を願う出る者が連日後を絶たなかった。城北の蔵王山より石や木材を切り出し運ぶ者、材を挽き竹を割る者、竹、縄、杉板、むしろなどを寄進する者、鋤鋤を取って労力を奉仕する者、無事落成を祈願する者、慰労の酒食を運び入れる者、など夜を日について奉仕作業が行われた。土台や塀に使用される山石は、十月十三日から二十七日間、荷車によって運ばれた。曳き子は家老、用人から前髪の子供まで加わった。十月十五日に地形水盛の見分がすみ、二十四日には土台ができ二十五日に始めての柱が立てられた。こうして十一月三日に上棟式を行い同二十二日には殆ど竣工した。上棟導師は長仙寺*中興九世行篤法印が勤めて棟札を納めている。総日数は六十六日余、大工、左官、木挽ら二百二十六人工、人足三千百三十五人工、藩士足軽千二十九人工、寺院側三十六・五人工、百姓町人百七・五人工、計延人工四千五百三十四人。三間と十間よりなる一の御倉、二の御倉、二棟六十坪の報民倉が外堀に影をうつして完成した。六十kgもあるケヤキの大額面には家老渡辺華山が藩主康直の代筆で「報民倉」の三大字を揮毫したといわれる。ついで藩士豪商らから続々と米穀が積み込まれ両倉には準備の米穀が充満した（八六六〜八六七